

明治のガス事業(三) : 福岡市を中心として

入江, 寿紀
福岡地方史研究会

<https://doi.org/10.15017/13695>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 11, pp.93-107, 1981-10-01. 九州大学石炭研究資料
センター
バージョン :
権利関係 :



明治のガス事業(三)

——福岡市を中心として——

入江寿紀

目次

- 一、はじめに
- 二、欧米初期のガス事業
- 三、日本におけるガス事業の創設(以上第九号)
- 四、東京ガスの発展と横浜のその後
- 五、英米のガス事業発展
- 六、福岡県における初期のガス事業計画(以上一〇号)
- 七、博多瓦斯株式会社設立
- 八、博多瓦斯の点火と開業当初の成績
- 九、博多瓦斯の事業拡張
- 一〇、福岡県下のガス会社事業統出
- 一一、明治末における九州のガス統出
- 一二、九州におけるガス事業の特質と経済情勢との関係(以上本号)
- 一三、明治末の日本におけるガス事業の特質
- 一四、わが国ガス事業の系統
- 一五、地方ガス事業の欠陥
- 一六、ガス市営と報償金
- 一七、ガス器具について
- 一八、ガスエンジン

七、博多瓦斯株式会社設立

九州最初のガス事業は、博多ではなく長崎だった。

長崎では、既に明治二十六年(一八九三)?ガス供給が個人事業として始められているようだ。しかしこのことについては、後ほど「九州におけるガス事業の概況」の項で述べるので、ここでは触れない。

九州で、長崎について起ったのが、博多だった。

明治三十年(一八九七年)の福岡市におけるガス事業計画が、明治三十一年から始まった不況のために立消えになった後しばらくの間は、打ち続く不況のために、ガスばかりでなくあらゆる事業がこの対策に追われ、事業家たちも新計画どころではなかった。明治三十五年(一九〇二年)に入っても、コレラ流行のため不況はますますひどくなるばかり。

同年のコレラは、六月唐津村に発生、七月二日には福岡市に侵入、続いて県下各地に拡がって行った。そのため経済活動はふさがり、町は恐怖に息を殺していた。

しかし、十月に入り、コレラ騒ぎが収まり祭礼集会が解禁されると、空前の豊作見込の上に米価の見通しも明るく、店頭は急に賑やかになってきた。この経済界の好転によって、ふたたび福岡市にガス事業を起こそうという話を持ち上がった。計画者は三十年の顔触れとは違っていたが、三十年の九州瓦斯の時と同じく東京瓦斯をモデルにし

ているようだ。

三十六年(一九〇三)に入ると、西部地方(九州北半分および山口県)は全国第一の起業地となり、京阪地方に遊んでいた金が流れ込んできた。この様な経済情勢に計画は急速に進展、同年(三十六年)六月一日最初の発起人企業申合せが行なわれた。同年末には、社名も博多瓦斯株式会社と決定し博多上対馬小路七番地・今任方(電話八)に創立事務所を開設、翌三十七年一月一日株式募集を始めた。広告によると、その内容は次のようになっている。

▲資本金。二十五万円(五千株、一株五十円)、証拠金二円五十銭

▲発起人。東京市京橋区築地二丁目二〇、橋本忠次郎・同市神田区関口町六、森清右衛門・同市本郷区向ヶ丘弥生町三、本間英一郎・同市京橋区銀座二丁目、岩谷松平・同市牛込区、浅香茂明・同市

京橋区木挽町四丁目六、宮城坎一・福岡市博多麴屋町二二、三苫寛一郎・福岡県糸島郡怡土村大字王丸四〇三、児玉驥・同郡波多

江村大字池田七、三島藤七

▲賛成株を三千株とし公募

▲申込期限。明治三十七年二月二十八日

右の広告から、発起人の内六人までが東京財界人で、東京資本を主体とした計画だったことが知られる。この点博多瓦斯は、他の群小ガス会社とは事情を異にしていた。

その後日露開戦(三七、二)前後には、西部地方の好況も一時中だるみとなったが、戦争に入ってから後は、軍需品調達・運搬等のため多くの金が西部地方にばらまかれた結果、この地方の経済界はふたたび活況を取り戻し、この好況の波に乗って計画も順調に進行、同年七月末か八月初めころには、東京瓦斯会社技師長・平松工字博士が同社主任技師および顧問となることを承諾、また、同博士の人選によって元横浜瓦斯局奉職の技師を招聘することが内定した。

なお、八月二日発起人会を開いた時、東京側発起人総代宮城坎一の外に、長崎大株主ホームリンガー商会代理者・山口林三郎の名が見えていることが注目される。

創立準備進行と共に従来の事務所では狭くなってきたので、同年十月中旬・創立事務所を博多上市小路十七番地(電話二一九番)に移転、同月二十四日待望の創立総会を水茶屋常盤館に開き、仮本店は当分の間創立事務所を当てることとなった。なお本社は、翌三十八年六月一日・市外千代村堅粕九九七番地の二に新築移転(広告による)、千代村は大正元年十月一日千代町(登記による)となっている。会社設立登記は三十八年(一九〇五年)一月六日、その内容は次のように記載されている。

△本店。福岡市上市小路一七△目的。瓦斯製造及び供給、瓦斯副生物精製及び販売、目的ヲ達スルニ附帯ノ業務△設立。明治三七、二、二四△資本。二五万円(一株五〇円、払込済一二円五〇銭)

△取締役。東京市京橋区築地二丁目二〇、橋本忠次郎・福岡市上市小路一〇、石村虎吉・東京市京橋区木挽町四丁目六、宮城坎一・同市牛込区加賀町二丁目二一、浅香茂明・福岡市麴屋町二二、三苫寛一郎△監査役。福岡市下西町四七、渡辺綱三郎・東京市神田区関口町六、森清右衛門・同市麴町区永田町二丁目五八、水野竜

八、博多瓦斯の点火と開業当初の成績

博多瓦斯株式会社は、水茶屋付近の筑紫郡千代村内官林約千七百坪と表構へに要する地所約百四十坪を購入、三十八年(一九〇五)一月二十五日起工式を挙行、機械は海外へ注文した。同年九月二十二日には、注文していた鉄管・その他諸機械が追い追いついたので鉄管理設に着手したが、海外注文機械は延着、十一月開業予定は延ばさねばなら

なかった。

創立事務所開設（三六年末）・会社設立（三七、一二）から月日が経過したこともあって、機械到着後は、一日も早く開業しようとな夜業までして工事を急ぎ、三十九年（一九〇六年）二月二十二日夜、福岡県最初のガス灯が第一区内石堂橋筋各所に点火された。この点火は埋設鉄管の空気抜き都合で全区を三つに分けたものの一つで、第二・第三区点火予定はそれぞれ二十三・二十四日となっている。なお、各区の範囲は次のように分けられていた。

▲一区 千代町より石堂橋を経て官内町以西各町を通過し、中島橋を経て福岡下名島町および下田角に至る。天神町（現天神）・極楽寺町通り・須崎・博多鰻町・中島町より東中洲町寿座前を経て明治座前に至る。

▲二区 博多川端町糸源角より博多停車場（昭和五十年現在の西銀本店付近）に至る各町、上下祇園町・上下西町・川口町より西門橋に至る各町、新道および片土居町。

▲三区 柳町（現在の博多町東南部）築港電停南、千鳥橋・恵比須橋中間付近）下登町・横町通り各町・下対馬小路・釜屋町・相生町・堂町・上下浜口町・蔵本町。

この点火について、同月二十三日の「福岡日日」は次のように報道している。

瓦斯点火は此地始めての事なるより、会社は多数の職工を派出し、各戸に付一々実際に点火し丁寧申述ぶるとせしを以て、各町各戸共点火に多少の遅速あるべしと。尚同社にては祝意を表する為め、昨今両夜は博多橋口町糸源前に「祝」字、今明両夜は博多官内町に日の出の瓦斯飾火を点ずる由

開業当時のガス灯数は、申込六二〇戸・約二千灯の内取付終了の約四二〇戸・一四〇〇灯（約二戸平均三、三灯）、そのうち八割は電灯引

用者、二割が石油灯使用者だった。なおこの外炊事用の申込みが二百戸あり、また大隈活版所・専売局福岡煙草製造所からは動力用の申込みもあっていった。この数字は同社の見込を上回るもので、ガス製造能力が一昼夜三万立方尺、一灯所要ガス量は十五立方尺の見込みなので、ガス灯申込二千灯だけで一杯の計算となり、同社は開業早々からうれしい悲鳴を挙げねばならなかった。

その後も申込みは続々と絶えず、同年六月にはメートルの使用数七百個に達し、メートル不足のため需要に應じることができず、メートルを注文したがその数は製造能力不足から五百個に制限されるというおまけまで付いた。また、灯用の外炊事用・医療用の申込みも多かったが、何分設備能力が少なく新規需用に應じることができないため、顧問技師平松工学士を招き、同社金沢主任技師と共に実地調査の上から、二個増設の計画を立てている。

このように需要は急速に増加したが、しばらくの間は博多瓦斯は欠損に悩まねばならなかった。

まず最初に、三十九年（一九〇六）七月の第三回事業報告を挙げてみよう。

○貸借対照表。資産ノ部

- ・未払込株金一三〇、五〇〇円・興業費勘定八五、六三一円五二六
- （・地所四、五七七、八二・建物五、一五九、五九三・登録税一一、五〇〇・権利買収費五、〇〇〇、〇〇・興業三属スル諸雑出費五、八三九、三五六・創業費五、〇〇〇、〇〇・鉄管二五、三三一、二一一・諸機械三三、三一〇、三〇一・供給管六七二、五六〇・工場道具三七九、八六〇・構内設備四八、三二五）・興業費未決算九七七、七八八・貯蔵品二一、〇一八、五八八・備品什器七一九、四八五・貸付米突一〇、一二〇、〇六〇・仮出金三四、九八五・当期損失二、一〇七、七〇八・銀行預金五二三、六四五・現金在高三九六、

四一七〇合計二五二、〇三〇円一七二

○負債ノ部

・株金二五〇、〇〇〇円〇〇・身元保証金四六三、四四四・掛買勘定一、〇一六、三四一・前期繰越金五五〇、三八七〇合計二五二、〇三〇円一七二

○損益計算

・当期収入金六、一四四、九五一・当期支出金八、二五二、六五九・当期損失二、一〇七円七〇八

備考。但シ前記収入金ノ外当期間内ノ売上瓦斯代金オヨビコークス代金ノ未収入金額合計金二、五六八円九〇一
右ノ通りニ候也

明治三十九年七月、博多瓦斯株式会社

取締役社長、伊藤伝右衛門。常務取締役、宮城坎一。取締役、渡辺

綱三郎、石村虎吉、岡藤美之助

右調査ヲ遂ゲ正確ナル事ヲ認メ茲ニ報告候也。

監査役、谷彦一、倉場富三郎

この損失二、一〇七円を出した原因は、次の三つにあるようだ。

一、事業規模に比べて人員が多すぎたこと。

二、開業まで日時がかかったこと。(株式募集開始三七、一、一。設立三七、一二、二四。開業三九、二、二三)

三、需要見込みの誤り。

へ注)もちろん、博多電灯株式会社がなかったならば、電灯需要は更に増大していただろうが、電灯・ガス灯共に需要が増大してきているので、欠損の理由とはならないと思う。

欠損対策として同社は、三十九年(一九〇六)春ごろ、新重役(人名不明)就任と共に、事務員を減少して年経費数百円を節約、成るべ

く工務部に力を注ぐ方針を採り、また六月二十日には、ガス点火用な

らびに炊事用具の陳列場を博多綱場町に設け、「同日から二十二日迄は毎夜店頭にて花瓦斯を点火し、又た瓦斯を使用せる炊事の実際を縦覧せしめ、尚同場にて瓦斯使用申込を受」けるなど、需要喚起に努めた。その結果、同年十二月中ごろの需要家数は一、二一戸・二、六一四口、また十月二十六日から十一月二十五日に至る一カ月間のガス

産出高は、点灯・炊事用一、一二〇、八七五立方尺・機関用三七、三七〇立方尺・街灯用一、七四〇立方尺と着実に増加してきた。更に四

十一年(一九〇八)には第一期社債六万五千円を募集(十二月五日払込終了)、この資金によって点灯器具の無償貸与を實行、需要増大を

図り、同月箱崎町宮崎八幡宮前までガスを延長して需要区域を拡大した。このガス器具無償取付けは非常な好結果を齎し、同年十二月中

ごろの無償取付け開始以来の増加高は、灯用一、七一六灯(総計六、八二六灯)・炊事用二八三口(総計八〇九口)を示した。

以上のような会社の努力と、ガスに関する知識の普及によって、四十一年下半期のガス供給高累計は一、二六八万六六五立方尺に達し、前期に比べ三七〇万一、三三〇立方尺を増加、同下半期には年六分の配当ができるまでに業績が向上した。

参考のため、同社の第四回(四〇、一、三一まで)および第八回(四一年下期)決算報告を挙げておこう。

○第四回事業報告(明治四〇、一)

△資産権利ニ属スル部

・未払込株金一〇万円・興業費勘定一〇三、七七五円二五八
(・地所家屋九、九六一円二〇三・権利買収費五、〇〇〇、一
・鉄管三三、五七九、四〇八・枝管四、六五〇、二五五・供給管三、
七〇八、九九二・諸機械三八、八六七、七一九・製造窯四、九九九

一一六・構内設備一三三、九三五・工場道具一、四八八、〇一七・瓦斯排水溝一、三八七、六一三。現在金一、六四〇、五九六。仮出金二八九、七八五・百三十銀行六、九〇八、四〇五・倉庫品一、七三七、八〇二・製作倉庫品七二、一九二・製作原料三三七、七六〇・備品什器八一、一三五・貸付器具一八、七三〇、二五〇・營業貸勘定九、二一五、三五・当期損失金二、二四四円四二九

・株金二五〇、〇〇〇、——・社債金六五、〇〇〇、——・身元保証金一、七二二、六四二・契約保証金三〇、——・仮受金六、三三三・準備積立金一、〇三九、——・別途積立金一、一七九、——・未払金勘定一、九三三、三七一・前期繰越金一、〇四六、九五四・当期利益金八、三二七、八四九〇合計三三〇、二八五円一四九

△負債に属する部

・株金二五万円・身元保証金六九〇、一七〇・懸買勘定四、九七二、七九二〇合計二五五、六六二円九六二

△利益配当計算

・当期繰収入金三五、五〇三円九五七・当期総支出金二七、一七六、一〇八・差引当期純益金八、三二七、八四九

△此配当

・前期繰越金一、〇四六、九五四・当期利益金八、三二七、八四九〇合計九、三七四円八〇三

△損益計算

・当期収入高三一、一〇七、三六七・当期支出金二六、四八一、九七五・前期繰越損金一、五五七、三二一・当期純利益金三、〇六八円〇七一

△と処

明治四十年一月三十日第四回定時總會ニ於テ第三回報告書中財産目録及貸借対照表中興業費勘定中ノ創業費及登録税ノ兩項合計金三、三二二円五〇銭ヲ損失ノ部ニ振替償却スルニ決議セラレタルニ由リ、当期營業上ノ利益金ヲ以テ右兩項金額ノ償却ニ充ツ。故ニ、差引金二、二四四円四二九、後期繰越損金（創業費償却残金）

○第八回決算報告（四一年下半年期・一二月）

△会社の資産ニ関スル分（借方）

・興業費勘定二一〇、七四七円七〇九・工業用品二二、五二九、三九四・營業用品一六、二九三、二〇八・備品什器一、三三〇、五三〇・貸付器具五〇、七六四、〇八一・銀行勘定一三、三八八、九三〇・營業貸勘定一三、九八六、五五一・仮出金一、一八〇、——現在金一三二、七四六〇合計三三〇、二八五円一四九

△会社の負債ニ属スル分（貸方）

九、博多瓦斯の事業拡張

前項で、博多瓦斯株式会社が、明治四十一年（一九〇八）下期年六分の配当を行ない、開業以来の欠損を解消したことを述べたが、營業成績はその後も向上を続けた。そのため、四十二年（一九〇九）夏には、「当会社ハ、従来点灯申込者ニ対シ普通灯具ノ分ハ全部無償ニテ取付来候処、右ハ本年九月三十日限リトシ、十月一日ヨリハ各種ランプ共相当代価申受クル事ニ変更致候（以下略）」と広告を出すに至る。

・準備積立金四一九、——・別途積立金四一九、——・株主配当金年六分七、五〇〇、——・後期繰越金一、〇三六、八〇三

ている。

以下營業成績向上の跡を、新聞記事によつてたどつてみよう。

▲〔明治四三、六、二一福日〕

博多瓦斯会社五月末現在の、瓦斯引戸数は三千四百四十四戸にして、内瓦斯点灯数八千三百九十灯・炊事口数一千三百四十三口なるが、昨年十二月乃至本年五月迄に於けるコークス産出高二百六十六万斤（内瓦斯製造用百五十六万斤・販売用六十万斤）、コールタール産出高四百八十六石（使用石炭一万斤に付一石五斗五升七合の割合）にして、同期間使用の石炭一千八百七十噸、之により製造したる瓦斯量一千九百二十万立方呎、供給高一千八百二十九万立方呎の内、社用及寄付に係る三十九万立方呎を除き販売瓦斯量は一千七百八十九万立方呎に達し、之を前期に比すに四百六十万立方呎の増加を告たり。

▲〔明治四三、一二、一〇、福日〕

（前略）前期にありては、長夜の期間長かりしと、同時に八景聯合共進会あり、異例の増加を示したるに、本期に入りては其最も華客とせる旧柳町（注）遊郭（いろまち）の移転あり、新柳町には瓦斯輸送の設備なく斯の如き減少を来せるものにして、一般の需要は其点灯・炊事口数が示すが如く漸次増加しつつあり。即ち、前年同期に比するも其販売量にて二百五十九万立方尺余の増加を示せり。猶次年度に於ては、工科大学線・新柳町線・唐人町線も延長の筈なれば、其曉には一層良好の成績を挙げ得べしと云ふ。

本期並に前年同期の瓦斯販売量並に其増加量を表示すれば下の如し。

月	四十三年後期	四十二年後期	差引増加
六月	二、五五〇、三四〇	二、一一九、七九一	四三〇、五四九
七月	二、二九〇、三六五	一、六二六、一九〇	六六四、一七五
八月	二、五六八、九一〇	二、一一〇、八七〇	四四八、〇四〇
九月	二、七四六、八五四	二、三五〇、二六〇	三九八、五九四
十月	二、九〇八、三六〇	二、四九三、七六〇	四一四、六〇〇
十一月	三、一五四、〇八五	二、九一八、八一〇	二三五、二七五
合計	一六、二二八、九一四	一三、六二九、六八一	二、五八九、二三三

（単位 立方呎）

▲〔明治四四、一二、一〇、福日〕

（前略）来る二十五日午後一時より（博多商業会議所に於て總會開催……の）由なるが、会社の当期成績は、

瓦斯引用家数三千三百十五戸・灯火数八千六百九十六個・炊事口数千八百九十個・瓦斯産出量千五百六十四万六千九百立方呎・送分量千五百六十八万六千六百六呎・一日平均八万五千二百六十四立方呎にて、前年今期に比し必ずしも好成绩と云ふべからざるは、本年度一般景気の不振なりしと、出願許可が予期以上に遅れ供給区域拡張充分ならざりしに基因すと云ふ。

猶、利益分配案左の如し。

・当期利益金一六、一九四円一銭・前期繰越金一、四二三元一五銭七厘・合計一七、六一七円六六銭七厘▲内、準備積立金八一〇円・別途積立金八一〇円・賞与金六〇五円・株主配当金八八五厘一四、五〇〇円・後期繰越金八九二円六六銭七厘

▲〔明治四五、五、八、福日〕

（前略）最近の鉄管延長は三百六十哩・此引戸数三千六百七十一戸・内灯火口数九千五百七十五口・燃料口数二千三百十九口にし

て、前年同期に比し鉄管延長に於て七哩・戸数に於て四百十戸・灯火口数に於て千二百三口・燃料口数に於て六百三十五口を増加せりと。

▲〔明治四五、六、一九、福日〕

(前略) 来る二十五日午後一時より博多商業會議所に於て定時總會開催の筈なるが、今期利益分配案は左記の如く、新旧兩株を通じて年八朱五厘なり。猶同社本期營業成績は、期末現在引用家数三千七百六十八戸・同灯火数九千七百九十三個・炊事口数二千四百五十口・街灯基数二十六個・機関基数十個にして、送出瓦斯量千七百九十九万二千三百六十立方呎なり。之を前期末に比すれば、二百三十万三千七百六十立方呎の増加なりと云ふ。(利益金内訳略)

▲〔大正元、一一、一三、福日〕

十月末日の現在引用家数は四千百一十一戸・灯用熱用孔口数一万三千五百九十一個・一日の瓦斯送出量十三万立方呎にして、前年同期に比し、戸数に於て七百七十六戸・孔口数に於て三千百三十四個・送出量に於て約三割方の増加を示せりと云ふ。

▲〔大正元、十二、一五、福日〕

博多瓦斯会社は、来る廿八日午後一時より博多商業會議所に於て總會開催の筈なるが、本期利益分配案は左記の如く新旧兩株を通じて年九朱なりと。

猶同社本期の營業概況は、導管の延長合計四万二千六十九間・引用家数四千百八戸・灯火数一万八百八十一個・炊事口数三千三百六十六個にして、前期末に比し導管に於て六千七百間を増し、家数口数に於て約二割強の増加を示せりと云ふ。

・当期利益金一万九千九百九十一円・前期繰越金一千三百八十七円

◎合計金二万一千三百七十七円

△此配当、準備積立金一千円・別途積立金一千円・賞与金一千九

百九十九円・株主配当金一万五千四百円(年九朱)・後期繰越金一千九百八十円

以上の成績から、博多瓦斯の発展にとって、電灯会社の存在はガス灯需要増加にそれほど大きな影響を与えなかったことを知ることができ。ガス・電気の関係について、大正元年十一月十三日の〔福岡日日〕は、次のように述べている。

九州電灯鉄道株式会社は、曩に会社の島田浅太郎・高橋吉之助両氏をして、社外に移し新たに電機商会なるものを組織せしめ、十月十日より三十日間無代取付けの大活躍を開始せしめたる結果、同期間に七千二百余個の増加を来たし、目下三分の二余の取付を終り、今月中には全部を完了せしむる予定なるが、之に先月十日現在の四万一千四百十灯を加ふれば現在灯数は殆ど五万灯に垂んとする有様なるも、今後猶此好成绩を持續し得べきや大なる疑問にして、此辺或は一段落を告げたるにあらざるなきか。

斯の如き電灯の増加は瓦斯に多大の影響を及ぼすべく思惟されるれども、事實は之に反し殆ど何等の痛痒(いたみとかゆみ)も感ぜず。瓦斯も亦相應の発展をなしつつあり。

この間博多ガスでは、需要増大に応じたるため、ガス発生炉・ガス管の増設に追われているようだ。すなわち、明治四十四年(一九一一年)三月には、九州帝国大学工科大学(同年四月一日開設。現九大工学部)門前までのガス鉄管敷設を終りガス供給を開始、新柳町線も近く認可の見込みとなり、同年八月には西公園以西に幹線鉄管を敷設する準備に取り掛り、翌九月中ごろには工科大学内のガス管敷設を終っている。また八月には、一昼夜三十万立方尺の製造能力を有するドイツ製機械の一部が到着するなど、供給区域の拡大・製造能力の増加に努めている。

以上の博多瓦斯の事業拡張期は、丁度不況期に当たっていた。しかし、今まで述べて来た会社の努力の外に、このころのガス・電気事業は、便利で役に立つものだということが認識されるようになって来たため、新しい生活必需品となりつつあった。（詳細については、後項を改めて述べる。）その外、明治四十三年に福岡市で共進会（産業発達のため、産物・製品の審査・表彰を主とする博覧会）が開催され、この地方一帯が活気づいたことも幸いした。そのため明治四十四年（一九一一）七月ごろまでは、「同社今日迄の成績を聞くに、昨年福岡市に開催されたる共進会の影響を蒙り、点灯用の瓦斯一時的の激増を来せし為め、本年は昨年に比し些しく減少の傾向ありしが、炊事用の分は年々増進を示し居り、客月中の引用家数は三千三百・孔口数一万百七に達せるが、之れを前年同期に比すれば、前述せし昨年の一時的激増の影響にて家数に少しく減退を示せるも、孔口数は却って三百有余の増加を来せりと云ふ。」と言う状態だった。

反面、「元来当会社は、長崎・山内氏の経営に係る瓦斯事業を除けば、九州に於ける最古の会社なるのみならず、元来福岡市は名古屋市などと異り、屋内の明るきを好むに係らず他の都市の瓦斯事業に比し発展の遅々たるは、（中略）瓦斯管布設の不足即ち鉄管の布設が重要な地点にのみ限られ、（中略）行渡り居らざるは其主因なり。（中略）（またガス料金は）既設の会社に於て、長崎・福岡の如き低率なる所ならず。」（明治四四、三、新任小山支配人談）と言う悩みもあった。だがガス料金が低廉だった事は、逆に明治四十四年以降一戸当り口数三以上と言う、まあまあ成績を挙げ得た原因ではないかと思う。

十、福岡県下のガス会社続出

博多瓦斯の設立計画進行と、日露戦争中の西部地区における好況（参照七項）に刺激されて、明治三十八年（一九〇五）五月門司市で

はガス事業が出願されている。その発起人は、鹿毛甲・山口林三郎・近藤保太郎・江原達三・宮崎勝・小出貫一郎・江藤国太郎・西川勝太郎で、合資組織でガス事業を営もうとするものだった。その翌三十九年七月二十九日には、東京市日本橋区伊勢町・井井百太郎が、創設願書を門司市役所に提出している。この二つの出願は、認可を得たかどうかは知らないが、共に実現には至らなかった。

その間博多瓦斯は、三十七年十二月設立にこぎつけ（参照七項）、三十九年二月には最初の点火を行なったが、創業当時は欠損続きで、その噂を伝え聞いたものか、暫くの間ガス事業を計画する者は出なかつたようだ。

しかし、四十一年下半年博多瓦斯が年六分の配当を行なうと、右へ憎らえとばかりにガス事業計画が続出し始めた。この時期の符合と、門司における最初のガス事業計画の消滅を考え合せると、これらのガス事業計画は、九州人特有の粗大な頭脳から創り出された模倣だったのではないかと疑いたくなる。何しろ、大した金も要らずに会社を造り金儲けが出来るとあって、ワッとガス事業に飛び付いたのではないか？。このような因縁が、第一次世界大戦と共に多くのガス会社を破滅の淵へと導くことになったのだらう。

ガス企業熱は、明治四十二年（一九〇九）まず北九州に起こった。明治四十二年と言えば、四十年春から不況へと転じた中央経済界の困惑が九州にも波及し、更に深くなるうとしている時だった。当時の状況を、明治四十二年六月二十七日の「門司新報」は次の様に書き残している。

今月は恰も一年上半期の諸勘定決済期に際すれば、普通の月末とは幾分其の趣を異にし、各銀行ともに諸取引上多少の繁忙を来たすは例年の例なれども、今年は春來引統ける商況の不振・其の他財界一般の不況なるに伴ふて、決算期たる月末に差迫れる昨今に当りて

も、毫も新資金の需要なきのみか、諸般の取引は洩月（例月の誤り）よりも反って一層閑却の有様なり。（以下略）

明治末のこの様な経済情勢の中で、福岡県下には八幡・門司・大牟田・小倉・若松・戸畑の各会社、下関に下関ガスが相次いで設立された。以下各会社の概要を簡単に説明しよう。

▲八幡瓦斯株式会社

△明治四十二年三月午前十一時、同町尾倉豊山公園内松陵閣で発起会開催。同年六月十一日同公園二葉亭で創立總會。翌月七月二十九日登記

△資本金は五万円（払込 一二円五〇〇）で、第一期の点灯数を一千個と見込み、その他の需要にも応じる計画だった。

使用ガスは、最初の間アセチレンだったが、「時代の推移と共に、アセチリン瓦斯は炊事用の便を欠き其他経済上面白からざれば、寧ろタン瓦斯として点灯炊事両端に向け満足に供給して一般需要者の便利を得んと議、株文側に唱道せられ、遂に去（明治四三、五）八日小倉住吉館に臨時株主總會を開き、資本金五万円を十万円に増加すると共に、タンガスに全然取換え将来の営業方針を議定」している。

▲門司瓦斯株式会社

△明治四十二年九月三十日午後五時から門司倶楽部で発起人会を開き、第一回株金払込期日を十一月十日と決議。同年十二月八日設立、翌四十三年十二月八日夜から営業開始。同月十五日開業式。

△商業登記内容次の通り。「明治四二、一二、一八登記、小倉区裁判所門司出張所」

●本店。門司市大字門司三一〇二●目的。一、瓦斯製造及供給。二、瓦斯副生物精製及販売。三、前二項ヲ達スルニ付帯ノ業務●設立。明治四十二年十二月八日△資本。二十五万円（一株五〇円、払込一

二円五〇銭）

●取締役。○門司市大字門司一八六五、藤波重雄。同所七四四、中村為弘。○下関市大字関後地村一九〇七、梶谷音三。○門司市大字門司九〇一、武内丈助。同所三一〇二、高階福太郎●監査役。○門司市大字門司三〇七一、藤井高文。○下関市西南部町一三一、宝辺岩次郎。○門司市大字門司三一〇二ノ一、内藤清太郎

▲小倉瓦斯株式会社

△商業登記内容次の通り。

●本店。福岡県小倉市魚町一四六●目的。瓦斯製造及供給、瓦斯副生物精製及販売、目的ヲ達スルニ付帯ノ業務●設立。明治四十三年四月十五日●資本。十万円（一株五〇円、払込一二円五〇銭）

●取締役（全部小倉市）。松井辰三郎、土方兵次郎、友枝只四郎、守永平助、平野温重●監査役（同上）。小林岩槌、藤本松次郎

△点火

〔明治四四、二、二〇、福岡日日〕（前略）明二十一日より点火を開始する由。

〔同右二七日〕（前略）既報の通り去る二十二日より馬借町・宝町・紺屋町・京町等に漸次点火したるが、光力大にして成績頗る良好なるを以て、開業勿々申込入激増し会社は多忙を極め居れるが、此際第一期の瓦斯管を埋設したる前記各町及鳥町・魚町・木船場町・米町一三三丁目・大阪町一三三丁目・船頭町・室町・大門町・東海岸通り等には、来る三月十二日迄屋内供給管の取附費用を要せざる由。

▲大牟田瓦斯株式会社〔明治四三、一二、五登記、柳河区裁三池出張所〕

△本店。大牟田町大牟田四一△設立。明治四十三年十一月二十四日△資本。三十万円（一株五〇円、払込一二円五〇銭）

△取締役。福沢桃介（東京）、松永安左衛門（大阪）、保里川茂承（門司市）、今井俊造（大牟田町）、坂梨哲（山門郡山川村）△監

査役。福沢大四郎（東京）、小柳初次（三池郡三川村）、石川幹（大牟田町）

▲若松瓦斯株式会社

△明治四十四年十二月十日、浜のみとりやにおいて創立總會

△商業登記内容次の通り。「明治四四、一二、二〇登記、小倉区裁判所折尾出張所」

●本店。若松町若松五六●目的。瓦斯製造及供給。瓦斯副生物精製及販売。瓦斯器具器械類ノ販売●設立。明治四十四年十二月十日●資本。二十四万円（一株五〇円、払込一二万五〇銭）

●取締役。○遠賀郡若松町修多羅五五〇、塚本忠治○福岡市麴屋町三、安増宝太郎○若松町若松四六五、大町美種○同所一五一、柳川精四郎○同所四三三、吉田磯吉●監査役。○若松町若松九〇五、宝辺森太郎○同町修多羅七一六、大庭与三郎○同町若松六六七、菊池四郎吉

▲戸畑瓦斯株式会社

△小倉市および遠賀郡戸畑町有志等出願、認可を得たが、起工延引期限切れとなり、明治四十四年五月末ごろ延期出願、翌大正元年設立。

△商業登記内容次の通り。「大正元、一一、五登記、小倉区裁判所黒崎出張所」

●本店。遠賀郡戸畑町戸畑二四六●目的。瓦斯製造又ハ購買及供給。副生物精製及其目的ヲ達スル附帯ノ業務●設立。大正元年七月二十一日●資本。十万円（一株五十円、払込一二万五〇銭）

●取締役。○小倉市船頭町四一、松井辰三郎○同市大阪町三九、広田久太郎○同市馬借町六〇、妹尾万次郎○遠賀郡戸畑町中原二八二、金子辰三郎○同町戸畑七一六、林茂雄●監査役。○小倉市紺屋町一八三、中野温重○遠賀郡戸畑町一五八、竹内万吉

▲下関瓦斯株式会社

明治四十四年五月中ごろ？第一期工事完成点火、同月二十一日開業式。

▲以上の外、明治末に久留米市に市営ガス計画が持ち上がっているが、大正時代のガス事業の所で述べるつもりなので、ここでは触れない。

以上の各会社の内容を通読すれば分かるように、これらの会社には三つの大きな共通点がある。以下、簡単にその共通点について触れてみよう。

▲一、資本金が小さいこと。

各社の資本金および払込資本金Ⅱへ注（）で示すⅡを並べてみると、次のようになる。ただし単位は万円とする。

△八幡五（一、二五）△門司二五（六、二五）△小倉一〇（二、五）
△大牟田三〇（七、五）△若松二四（六）△戸畑一〇（二、五）すなわち、払込み資本で見ると、八幡の一万二千五百円を最少とし、最大でも大牟田の七万五千円にすぎない。博多は六万二千五百円（二万五千の四分の一払込み）だから、他の会社と大して変らない。

▲二、副生物精製を行なった会社はない。

各会社の営業目的を見ると、どの会社も申し合わせたように副生物精製を挙げているが、実際はこれを実行した所はなかったようだ。ただし博多は、開業後しばらくしてからコールド製造を始めている（参照九項）

▲三、地場資本だけで構成されている。

ただし大牟田だけは、福沢（東京）・松永（大阪）と、福岡県人でない取締役が居るが、この二人は福博電気軌道株式会社設立のため南下してきた人なので、純粹の中央資本家と見ることはできない。

る」ことを決定している。

四十五年（一九一二年）に入っても、ガス事業熱は一向に衰えを見せなかつた。まず一月に佐世保瓦斯が設立されると、春には豊州瓦斯が別府に点火、六月佐賀瓦斯設立、同月宮崎では岩下工場で木瓦斯が点火されている。

以下、このガス事業続出についてその特質を探ってみようと思うが、その前にまず、このころの経済情勢を大正四年十二月十日刊（明治文
明史）によつて見てみよう。

株式は明治四十年一月十八日を絶頂とし、爾來暴落に暴落をつづけ、財界は再び不振となり、不景気の声は春より夏、夏より秋と、日を追つてますます高くなつた。四十一年を迎ふるも尚ほ財界は依然として不振であつた。

尤も此の四十年の不景気は、独り我が国のみならず、世界を通じて財界は不振であつた。欧米の金融市場は、常に繁忙を極め、金利は引締り勝であつた。然るに四十年十月に至つて、米国では株式および銅が暴落し、之に関連した商人・銀行が一時に破綻（かぎがこわれる。転じて支払い停止になる）を來した結果、一大混乱を惹起し、ニューヨークを中心として、西はシカゴより東はニュー・イングラントに至るまで大恐慌を來したのであつた。

此の年の米国の銅価は、年の初めは百ポンド以上であつたが、三月の初めには百九ポンドとなり、それより下落に下落をつづけ、終に六十ポンドまで下落した。

銀も亦此の影響を蒙り、三十二―三ペンスの間であつたものが二十七ペンスに下落し、清国との貿易は非常の影響を受けた。

米国の大恐慌は、直ちに我が国の生糸貿易に波及し、千三百円以上であつたものが忽ち千円以下となり、其の他米国向きの産業は共に不振となり、加ふるに幾多の新設会社も、株式市場の暴落より

中途にして挫け、もともと事業が目的でないのであるから、解散したものが少なくなかつた。

此等の新会社は倒れ出す、民間は不景気を叫ぶ、銀行は一時に取りつけに迫られて困り、中には支払ひ停止をしたものも少なくなかつた。

当時米国に於ては、大蔵大臣が巨額の大金を以つて臨時救済をなし、民間の富豪も政府の行動を助け、幸ひに破綻（破たん）を一小区域に限り、一時の急を救ふ事が出来た。

米国の例に倣つて、我が国にも財界救済の声は四方より起つた。つまり不景気は日本銀行が貸出しを渋つたのが固であると言へ、同銀行の保證準備拡張を、見返り品拡張を主張するもの多く、又た興業銀行の資力を増加せよと叫ぶものもあつた。

政府は、大蔵證券三千七百五十万円を償還し、一時金融市場を潤さんとし、有力なる銀行業者等も政府の救済方法を助け、四十一年六月より警戒を寛にし、等しく貸出しをするやうになり、こゝに株式も漸やく人氣を得て稍恢復せんかの萌しはあつたが、財界反動の勢力は容易に衰へず、不振は依然として不振をつづけ、一部の小刀細工が、経済界の大勢を動かす能はざることを示した。当時の不景気は、米国が全く景気を恢復し終りたるまで、わが国も不振をつづけたのであつた。

九州におけるガス事業は、このような不況の中に全盛期を迎えたのだが、その原因としては次の三つが考えられる。

- 一、九州の特殊経済事情
 - 二、先進会社の好成績と小資本による開業
 - 三、ブーム時における附和雷同
- この三つは、そのまま当時のガス事業の特質ともなっている。

以下その一つ一つについて、今少しく詳しく見てみよう。

一、九州の特殊経済事情

明治末の日本経済界は、前述したように不況の連続だった。しかし九州は幾分事情を異にする。まず、明治四十五年一月二十日の「福岡日日」の記事を見てみよう。

一兩年の九州の景況

最近一兩年間に於る九州の経済界は、他の地方の萎靡（衰え弱る）不振なりしに比し、概して好勢を保持し来れるもの、如し。蓋し是れ九州の経済界は、戦後に於ける恐慌の惨禍を蒙れること比較的尠少（すくない）なりしと、連年天裕（天の助け）を得て米作豊穰（豊作）を呈したる結果ならずんばあらず。

就中福岡を中心とする北九州の企業界の如きは、従来曾て見ざる活況を呈し、軌道に電灯に、得た各種の事業に、新に勃興（にわか）に起る）せるもの殆んど枚挙に暇あらず。従って金融機関も、他の地方に比すれば尠からざる活況を呈せり。（以下略）

その中でも鹿児島県は、特に景気が良かったようだ。すなわち、明治四十年九月日本生命福岡支店長・浅岡雄之助が、視察談の中で次のように言っている。

鹿児島県には資金多しとは予て聞きつるが、實際然るが如し。保険契約金を支払ふに、他の地方に於ては時に支払に窮するもの多きも、同県に於ては斯かること極めて尠なし。此頃、鹿児島電気の株式募集を開始するや、応募は募集株の四十何倍に達したり。此中には勿論同県以外の応募も若干含有すべきが、大部分は同県民の応募と見て可なり。

以上のような九州の特殊経済状況が、ガス事業統出の原因の一つだと考えられる。

二、先進会社の好成绩と小資本による開業

明治末のガス事業統出は、九州だけの現象ではなかった（後述）。

したがって、九州におけるガス事業統出を九州の特殊経済事情だけで片付ける訳にはいかない。では、外に何が原因だろうかと考えてみると、東京・横浜などにおけるガス事業の好成绩、九州では博多瓦斯の営業成績向上が挙げられる。（詳細については全国のガス事業の項で述べるので、ここでは触れない。）しかも、僅かな資本金で開業できるというので、ワッとガス事業に飛びついたのではないかという気がする。それは、各会社の株主たちが、ごく一部の会社の例外を除いて、全部地場の小資本家で占められていることから想定される。参考のために、明治四十四年二月の九州における各ガス会社の払込資本金を挙げてみよう。

(註) ()内は未払込も含んだものを示す。単位千円。

▲博多一二五(五〇〇) ●八幡五〇(五〇) ▲小倉五〇(二〇〇)
▲大牟田七五(三〇〇) ▲熊本一二五(五〇〇) ▲鹿児島一二五(五〇〇)

なお、不況時に好成绩を挙げた原因については次項で述べるので、ここでは触れない。

三、ブーム時における附和雷同

これもまた、九州だけのことでなく全国的な問題だと思いが、九州地方の例について述べる。

東京・横浜・博多では儲けている。資本はあまり要らない。どこそこでもガス会社が出来たそうだ。となると、先進会社はどうしてその様に利益を挙げているかなど深く掘り下げもしないで、われもわれもとそのブームに乗り遅れまいとする。これは特に九州経済界の弱点だったようだ。その有様は、昭和四十六・四十七年（一九七一～七二年）

のボーリング・不動産事業熱にそっくりだ。

なお、プームの伝播について見てみると、まず明治三十七年十二月博多にガス事業が成立、最初は欠損だった同社が四十一年下半年六分の配当を行なうと、四十二年から四十四年にかけて福岡県下都市部にガスプームが起こり、明治四十五年福岡県以外の各県にも波及していることがよく分かる。ただし、長崎のガス事業が二十六年に始められていたのは、明治末までは残っていたその先進性によるものだろうし、また、鹿児島は、その藩政以来の進歩的空氣と特殊經濟事情によつて、明治四十三年に設立された、と考えてよいだろう。

(七九頁より)

島炭坑に至りて、全坑の坑夫吉原安太郎外二名に対し、坑夫稼をなすと称し、前記同様の手段をもって金五円を安太郎より騙取し翌二十九日は西松浦郡二里村字川東木賃宿片岡熊太郎方にて金十円を翌三十日福島炭坑にて金十五円と全坑より発行の金券五円都合三十五円を騙取せし事伊万里署の探知する所となり、詐欺横領罪として、一件書類のみ当検事局へ送られたり。

大正三年九月七日 試掘許可

西松浦郡西山代村大字楠久津児島金八氏の出願に係る全郡全村池内石炭坑三二二、八四〇坪の採掘鉱区増区願は今回許可さる。

大正三年九月七日 義損金応募者(四)

金壹円	多久鉱業株式会社	東多久炭坑	古川	剛
金壹円	全		直塚秀太郎	
金壹円	全		牧	武彦
金壹円	全		平川	静
金壹円	全		辻	寛
金壹円	全		末次	与作
金壹円	東松浦郡	巖木炭坑	湯浅吉太郎	

大正三年九月九日 厭世の結果自殺

西松浦郡西山代村山代炭坑納屋坑夫永田シズエ(三十八)は、内縁の夫平野三吉(四十八)との間に私生子マツエ(十三)三次(七つ)ミツエ(二つ)と都合五人暮しなりしに、五年前より肺病に罹り且つ夫三吉も客年十二月頃より病氣のため歩行自由ならず、只僅かに長女マツエ一人にて仕事をなし糊口を凌ぎ居りしが、厭世の結果去る五日午前三時頃自宅に於て縊死を遂げたりと。

(一三〇頁へ)